
俺だって友達が少ない

柏崎星奈は俺の嫁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺だって友達が少ない

【Nコード】

N1941U

【作者名】

柏崎星奈は俺の嫁

【あらすじ】

あの残念系青春ラブコメディの二次創作作品です。

友達が少ないことに定評のある主人公が隣人部に入り友達を増やすために努力します。

只今、怪我&mp・病気が併発中です。

続きを待っている皆様しばらくお待ちください。

隣人部って何ぞ？

俺の名前は二神海翔^{ふたがみかいと}。

至って”普通”の高校生。

しかし強いていうなら

”俺は友達が少ない”。

”何故友達が少ない”かという原因は2つある。

まず1つ目に、俺は人と話をする事が苦手なのだ。

語彙センスはそれなりにあると思うが、人見知りをしてしまったりなのでその語彙センスは活躍せず至今已に至るのだ。

そして2つ目に、目付きがかなり悪い。

不良に間違われることはよくある。

不良に絡まれる率も他の一般生徒の3〜5倍だろう。

さて俺はつい先日、この”聖クロニカ学園”に転校してきた。

聖クロニカ学園 名前からも判るであろうが此処はカトリック系キリスト教学校である。

この地には昔住んでいたらしいが幼いときに事故にあって記憶はか

っ飛ビンゲした。

つまり俺にとって此処は

新天地なのである。

そんなときに俺は聖クロニカ学園の部活動で

『隣人部』という一風変わった名前の部活を見つけた。

「えーと、『とにかく臨機応変に隣人とも善き関係を築くべくからだと心を健全に鍛えたびだちのその日まで、共に想い募らせ励まし合い皆の信望集める人間になろう!』か」

「ん?これって」

そこで1つ気づいた。

『とにかく臨機応変に隣人と』も『善き関係を築くべくからだ』と心を健全に鍛えたびだち『のその日まで、共に想い』募』らせ励まし合い皆の信望『集』める人間になろう!」

斜めに読めば

『ともだち募集』

しかし信望と集めるの間に接続詞がない気がするが印刷ミスだろうか?

でもとりあえず俺は

俺は、入部を決意した。

隣人部って何ぞ？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちなみに何故、信望と集めるの間に『を』を入れなかったかという
と改行調整が難しく妥協したのです。

メタ発言すみません。

更新日程は週一か二週に一回くらいになります。

遅くてすみません。

同時連載『IS』もやっておりますが更新遅くてすみませんm（
ー）m

あ、ご意見ご感想お待ちしております。

では今回はこの辺で筆を置かせていただきます。

入部！！

翌日、早速隣入部の部室である”礼拝堂談話室4”へ向かった。

”礼拝堂談話室4”に着くと中から話声が聞こえる。

こういうことは第一印象で良し悪しが決まるのでしっかりドアをノックして入ることにした。

コンコン

ドアをノックすると急に話声が途絶えた。

ドアを開け、聞いてみる。

「隣入部ってのはここか？」

「ああ」

藍色がかかった黒髪の美少女が返事をしたのを確認して本題に入る。

「えーっと、なんつうか……入部希望なんだが」

「ふむ、リア充でもなさそうのようだからいいだろう。ただし、入部条件として合言葉を言ってもらおう」

「（合言葉？あ、友達募集か）友達募集ってやつ？」

「いいだろう、お前も今日から隣入部部員だ」

どうやら入部は認められたようだ。

「とりあえず自己紹介だな」

藍色がかかった黒髪の美少女の名は『三日月夜空』というそうだ。

ついでに『夜空』と呼べと言われた。

口調が男っぽいのが特徴だ。

「次は貴様だ”肉”」

「あたしは柏崎星奈。運動も勉強もパーフェクト。」

肉と言われて話始めたのは『柏崎星奈』というらしい。

金髪巨乳の美少女。”肉”の意味もわかった気がする。おそらく彼女の丰满なボディのことを夜空は”肉”と呼んでいるのだ。

柏崎が話終わると次は俺だな、とばかりに話始めたヤンキー。

名を『羽瀬川小鷹』という。茶髪混じりの金髪で

『金なかったからヘアスプレーで自分で染めてみた』みたいな感じ。

しかし母親がイギリス人でハーフであることを知り、納得した。

呼び方は『小鷹』でいいと付け足された。

すると学園の下校時刻になったため俺にとっての第一回隣入部は顔

合わせで

オワタ＼（＾o＾）／

入部！！（後書き）

次回遅めです。

星奈「モン狩やるわよ」(前書き)

はいはい(グ)、・・*()主だす。
早めに出てたのでうりました。

星奈「モン狩やるわよ」

第二回隣人部活動。

「さてそろそろ隣人部の活動を決める活動をするでしょう」

何か意見があるやつはいるかと夜空が聞く。

夜空自身も自分の考えがあるという様子でもなく、とりあえず聞いてみるという感じだった。

小鷹は小鷹で今日も不良と絡まれたらしく、ぐったりとしていた。

俺も特に考えもなく少し困っていた。

頼みの綱である柏崎に聞いてみた。

「柏崎は何かある？」

「海翔、あなたはあたしのことを星奈と呼びなさい」

「何で？」

「夜空が夜空であたしが柏崎だと優先順位あたしの方が低いみたいじゃない」

「あつそ」

「どーでもいいーね」

「海翔、聞いてる？」

「はいはい星奈でいいんだろ」

そう呼ぶと満足そうな顔して一つ提案する。

「隣人部メンバーでモン狩しない？」

「は？」

夜空が「何言ってるんだ、この肉！！」みたいな感じで星奈を見た。

しかし星奈も負けじと理由を説明する。

「最近あたしのクラスの男子がやってて、けっこう流行ってるらしいのよ。パーティープレイもあるから友達が出来た時の予行練習としてやってみない」

いい提案だろうと、どや顔で夜空を見る星奈。

夜空も「皆やってて、予行練習なら仕方ない」と考えたようで、承認したようだった。

「では来週の月曜日に全員モン狩ってくるように」

と夜空が締めたところで下校時刻のチャイムが鳴った。

星奈「モン狩やるわよ」(後書き)

次回もお楽しみに。

強襲する小島の水流（前書き）

はいはいゞ（、、＊）ゝどーも主です。

IS 絶賛放置中です。

すいませんm（――）m

次回から隣人部メンバーで活動報告します。

強襲する小島の水流

第三回隣人部

「皆モン狩は持ってきた？」
と星奈が全員に確認をした。

ちなみに前回の隣人部でモン狩をする事になった俺はモン狩を買って2日でほしいのボスモンスターを狩った。

「おう、かなり進めたぜ」と俺。

「ああ」と小鷹。

「肉の分際で仕切るな!!」と夜空。

こいつら相変わらずなか悪いな。

「ふん、あたしかなり進めたもんね」

「どこまで進めたんだ？」と小鷹が聞く。

「どうせ肉のことだ。クラスの男子に頼んで進めてもらったに違いない」

そう言いつつ星奈のPFPをひたたくってデータを確認した。

クリアしたクエストの履歴のところを男子と一緒に行ったクエストのデータが大半を占めていた。

「ふん、やはり肉はそんなもんだろっ」

「で、夜空はどのくらい進めたんだ？」

余り罵倒させ過ぎると星奈も黙っていれなくなるので俺が話を反らしてみる。

「私は肉のように他人には頼らないからな」

要するにそこまでは進めてないと言うことですね、判ります。

小鷹は聞くだけ無駄だな。

え？なんで？つて？

プレイ時間の桁が、ね。

1桁足らんね。

2時間で！！！！

モン狩でパーティープレイをする場合に集まる”集会所”というところには4人が集まった。

まあ言っちゃなんだが、プレイ時間に比例して装備の質も変わるな。

星夏の装備はレオリアと言う”雌華龍”の装備である。

英国の女騎手のような装備でとてもカッコイイ。

夜空の装備は、ナクガルルガと言う”塵龍”の装備。

見た目はまあまあ。

そして小鷹。

お前は　ドンマイ。

流石に2時間じゃ駄目か？

”初期装備”のままだった。

凄い装備格差だな、とつくづく感じた。

え？俺の装備？

かっこ良く言うとデフォルト。

普通に言っと”初期装備”。

まあ武器だけは最上級クラスだが。

「それじゃ、何狩りに行く？」

チャラチャラした装備の星奈がそう取り仕切る。

「おい！肉塊！！貴様が仕切るな！！！」

地味だがスキル優秀な夜空がそう罵倒し、クエストを選ぶ。

俺と小鷹は黙ってクエストを受注し、クエストの受注がまだ済んでいない星奈を待つ。

そしてクエストにいざ出発。

クエスト内容は

「強襲する小島の水流」

さて、どうなることやら。

強襲する小島の水流（後書き）

今回はカットで。

大爆殺！！！！！！（前書き）

はいはいグ（、・*）んどうも主です。
書けました。疲れました。

大爆殺！！！！！！

クエストがベースキャンプから始まり、皆一斉に動き出す。

俺と星奈は討伐目標である『ドスロアルロ』の初期配置を知っているのでベースキャンプで支給されている地図も取らずに走りだす。

夜空は多少の支給品を回収し、俺らの後ろを追ってくるような形で走ってくる。

そして小鷹はというと支給品を取るのにかかなりの時間を要し全てを取る時には俺と星奈が目的地に到着したところだった。

ちなみに全員の武器は

星夏…太刀

夜空…ライトボウガン

小鷹…大剣

俺…ランス

といったところ。

俺と星奈がドスロアルロを囲む。

武器を構え、俺と星奈が攻撃を始める。

「死になさい」と星奈。

太刀の連続切りがドロアルロの後ろ足に当たる。

俺は頭の近くで地味にチクチクと突きを入れてダメージを稼ぐ。

「そういえば海翔はなんでそんな雑魚装備なの？」

まあ、だいたいの人がするであろう質問。

そんな質問を星奈が投げかけてきたのでどや顔で

「こんな雑魚に強い装備要らないから」

と返してやった。

「アンタって暇人ね」と星奈。

その後、夜空が慈悲深い目で

「そうか、一人でそんなやりこんだか？……大丈夫だ。いつかは誰かが評価してくると思うぞ」

と慰めてくれた。

夜空のゴミ虫を見るような目が余計に傷ついたんだが。

そして夜空到着。

「夜空、アンタ遅かったわね。ビビってこれなかった？」

挑発を始める星奈。

夜空は無視を貫く。

「アンタ、ドスロアルロゴときにビビって喋れもしないなんてww」
星奈は更に罵倒し続ける。

そろそろ夜空も苛つきが隠せないようでもプルプルとPFPFと手を振るわす。

しかし未だに沈黙を保っている。

恐らく星奈に自分のクエストを手伝ってもらっていたために強くものを言うことが出来ないのだろう。

だがとうとう我慢ができなくなり

「ちょっとアンタ聞いてんの？」そう聞きながら星奈は夜空に切りかかってしまう。

星奈の武器は夜空のよりかなりランクの高い武器でそこその防御の夜空を一撃で葬るくらいの威力があった。

夜空は星奈に切り裂かれ死んでしまった。

リスポーン位置はベースキャンプなので夜空はそこまでワープしていった。

そうして夜空が爆発した。

「何をしてくれる肉!!」

「だってアンタが返事しないから……」

急に怒り出した夜空に星奈もビビっているようだ。

キレた夜空は星奈の居るエリアにたどり着くとライトボウガンに仕込んだ弾を発砲。

ドスロアルロの後ろ足に撃ち込み、その後逆サイドの星奈に貫通。

どうやら貫通弾のようだ。

防具の優秀な星奈は夜空のように簡単には倒れなかったが。

「何すんのよ」と星奈。

今回は明らかに悪い星奈。

流石に口出しするのも面倒くさいのでスルー。

星奈も苛ついたのか、夜空に駆け寄る。

すると夜空が”ニヤリ”と口元を緩める。

なんと、星奈の周りにはその上を歩いたり、走ったりした場合に、発動する痺れ罾が仕掛けられていた。

効果は名前の通り、数秒間目標を痺れさせるといふものだ。

夜空の前に痺れる肉が一匹。

当然、モンスターと同様に星奈を狩る気満々の夜空は星奈に駆け寄る。

そして爆弾をいくつも設置する。

その後距離をとり、銃口を星奈に向ける。

「蜂の巣にしてくれるああわあああ！……！……！」

「ちよつとまつて」

火炎弾を発砲。

ドーン！！

”大爆発”

そして”大爆殺”

惨く、酷い。

そんな死に方だった。

あれ？そういうえば小鷹は？

そう思っただけを確認してみると……爆発に巻き込まれ、死んでいった……。

ちなみにこのモン狩は全プレイヤーが合わせて3回死んだ時点でク

エスト失敗。

夜空…死因：星奈による斬殺。

星奈…死因：夜空による爆殺。

小鷹…事故死。

「全く何をしてるんだ（のよ）！！」と夜空と星奈が小鷹を責め立てる。

こいつらこんな時しか息が合わないな。

そして小鷹、ドンマイ。

「なあ海翔」

「なんだ小鷹」

「その可哀想なものを見る目が哀しみに拍車をかけるんだが」

「おお、すまんすまん」

危ない、危ない。

Sだということがバレそうになった。

こうしてこのモン狩大会はPFPとモン狩を買う金を使った割には得るものがなかった。

大爆殺！！！！（後書き）

第三回隣人部活動報告

ゲームを通すことにより部員の絆を深めました。

?部員のコメント

・三日月夜空〔部長〕

部員の皆と絆を深めました。

・柏崎星奈〔部員〕

皆と仲良く楽しくゲームが出来て良かったです。

・二神海翔〔部員〕

偽造乙

つか、ゲームって自白してるけど大丈夫か？

・羽瀬川小鷹〔部員〕

orz

ギャルゲーを隣人部でやってみた。(前書き)

はいはいグ)、・*(´)主です!!遅くなりました。それでは
どろぞろ!!

ギャルゲーを隣人部でやってみた。

第四回隣人部

「何これ？」

部室に入ってまず疑問をもった。

何故なら部室にTVがあるからさ。

しかもディスプレイがかなりデカイ。

「見たらわかるでしょ」

星奈がそうに突っ込んできた。

「で、今回は何する気なんだ？」

「私は知らない。肉が勝手に用意したのだからな」

「アタシは考えたのよ。恋愛シミュレーションゲームをする事でコミュニケーション能力を磨くことをね!!」

「で、なんつータイトルのゲームをやるんだ？」

関心なさそうに星奈の話をスルー。

「なんだっけ？えーと…」

そう言いながら鞆へ向かう星奈。

どうやら今回はまだやっている様子もなく、タイトルも、うる覚えだった。

「えーと…ときめいてメモリーデイズフ…だって。略して、ときメモフ」

「んで、準備は出来てるのか？」

「まだよ」

星奈がそつに應えると、

「使えない肉だ。早く準備しろ！クソ乳牛女！！」

夜空は素晴らしい罵倒コンボを決めた。

あはれ星奈……。

それにしても小鷹が来ない。

まあいいや。

おっ！！準備が完了したようだ。

早速星奈が画面真ん中を陣取り、その両端に俺と夜空も座った。

そして起動。

”C?NAMI”というロゴが出てきて、ときメモ7のタイトル画面に移動する。

push enter

の白い文字が点滅している。

星奈はスタートボタンを押し、自分のキャラを作っていく。

名前を決めるところまで進み、星奈が苗字を書いたところで事件が起きた。

「つまらんな」

夜空がそうに言い放ち、コントローラーをひったくる。

そして、”ガチャガチャ”と適当に名前を決めてしまった。

でもって、出来たキャラがこれだ。

俺の名前は柏崎せもぼめ。自分で言うのはなんだが、ただの高校生だ。

とテキストが表示されている。

これを見た星奈はコントローラーを握りしめプルプルと震えている。

「何よ!!!せもぼめって!!!」

「貴様のつまらんプレイを少しでも面白くしてやったんだ！！感謝が足りんな」

「つまらないってどういふことよー！ー」

「そのままの意味だと思っが？」

会話は更にヒートアップ。

もうそろそろ進めたく感じた俺は、星奈に早く進めるように言っ。

「わかったから早く進めようぜ」

「このクズ肉が！海翔もこういつてるではないか！！さっさと進めろ！！」

「わかったわよ」

そんなこんなでテキストを進めて行くと、ヒロインであろうキャラクターが現れる。

ちなみに主人公は高校1年からこの高校に転校してきたらしい。

「初めまして、柏崎せもぼぬめ君。私は藤林あかり。これから仲良くしてねー」

そこで1番目の選択肢が出てきた。

1：これからよろしく、藤林さん。

2：気安く話かけんじゃねーよ。

3：よろしくお願いします。

の3択。

「2ね」「2だな」

と即決した星奈と夜空。

「いやいや2はないだろ!!」

ここは1でフレンドリーか、3で堅実さをアピールしようよ……!

おっ!!そこで小鷹が部室に入ってきた。

「よっ!!小だ……」

そこで俺の挨拶はかき消された。

「帰りなさい!!クソビッチが!!」

「失せるカスが!!」

という星奈と夜空による藤林あかりに対してのコメントによって。

しかし、状況の理解が出来ていない小鷹は、自分のことだと思ったのか走って帰って行った。

タイミングが神すぎる。

そしてゲームに戻る。

つか、皆スルースキル高いなWWW

「ごめんなさい。なにか気にさわった？次は気をつけるから、ね？」
「次から気をつけりゃいいって問題かしら？アホなの？馬鹿なの？死ぬの？」

「そんな謝り方されても誠意が感じれないな！！金でも出さなければ、私は許さんぞ！！！」

うわっ！！スゲーご乱心召されてるよ。

そんな感じで、”藤林あかり”が現れる度に罵倒し続ける。

そしてメニュー画面が表示された。

メニュー画面にはさまざまな項目がある。

ちなみに勉強、運動、休む、部活などの項目があり、選択した項目に応じてパラメーターが上がるのだ。

「とりあえずどのパラメーター上げるんだ？」

「勉強よ」「勉強だ」

と豪語された。

星奈いわく「勉強が出来ない奴ははつきり言って、使えないわよ」と断言された。

まあ…正論かもしれないから反論しづらい。

星奈と夜空が正しい答えがわかったようで良かったです。

みたいな、お父さんの様な気持ちで見ていると2を選んだ理由がひどかったけどな!!

「何で2なんだ？」

「こんな本読むくらいなら勉強しなさい!!」

「勉強をしると言ったはずだ!!」

どごその教育ママみたいなコメントもうお腹いっぱいです。

そして再びゲームへ。

「お先にどうぞ。」

「ありがとうございます。えっと…私の名前は長田有希子ながた ゆきこって言います。よろしくお願ひします」

と挨拶してきた。

そしてビッチ嫌いの星奈は藤林あかりを放置し長田有希子 に入ることを決定!!

そうしてゲーム内での数ヶ月が過ぎたころ、主人公に嫌な噂がたち始める。

「え!?!何が起きてるのよ!!何で好感度が下がってるの?」

「私に聞くなクズ肉」

「ちょっと待ってる。えーと……女の子を傷付けてしまった場合、早く謝りに行こう！そうしなければ他の女の子の好感度も下がってしまっぞー！……だって……多分藤林あかりじゃね？」

「何でアタシが謝る必要があるの？こんな陰口を言うクソビッチに……！」

頑固だな、そう思いつつも言葉に出さない。

何故かって？

余計なことで喧嘩になるのは御免だからな。

つーことで藤林あかりをさらに無視。

そして、藤林あかりだけではなく悪評のあるせもぼぬめからは長田有希子までもが離れていった。

そしてせもぼぬめは

”卒業”した

最後のテキストは……

『俺の青春は灰色のまま終わった。とても残念だ。まあ、俺にはふさわしいかったかもしれないが』
だった。

「」「」……「」「」

部室を包み込む無言の圧力。

そして沈黙を破ったのは星奈だった。

「な…な…なんなのよ、これ！…！」

おお、憤慨している様子。

そうして今日の部活が終わった。

ギャルゲーを隣人部でやってみた。(後書き)

第四回隣人部活動報告

ゲームを通すことにより更なるコミュニケーション能力の向上を目指しました。

部員のコメント

・三日月夜空「部長」

楽しく部員の皆とコミュニケーション能力を磨きあいました。

・柏崎星奈「部員」

ゲームをやるうちにコミュニケーション能力がついていくことが判りました。また、人の陰口を言う奴は死ねばいいと思いました。

・二神海翔「部員」

最近の女子は言葉を選ぶことが苦手なのが判りました。

・羽瀬川小鷹「部員」

悪口を言われましたorz

なんだかな、最近見られてる気がすんだ。(前書き)

約5ヶ月ぶりに帰って来ました。

すんません。不定期で

すんません。まよチキもすんません。駄文で

よしでは本文へ。

ちなみに長さはシリーズ最長でした。

なんだかな、最近見られてる気がするんだ。

「最近何だか見られてる気がするんだよな…」

「「「はあ?」「」」

部室に入ると、とたんにそう言ったのは小鷹だった。それに反応した俺こと二神海翔と柏崎星奈、三日月夜空は全く同じ返事を返したのだった。

「本当なんだよ」

どうやら割と焦っているらしく、ストーカーについても考え始めている。

「小鷹がそう言うなら本当だろう」

意外だった。あの夜空が簡単に人の話を信じるとは思わなかった。

「見られてる”気がする”のは確かに本当だろう」

「ごめん、訂正。」

全く信じてなかったね。

「トイレとか飯とかそんな時に見られてる気がするんだ」

「あんたに警戒してるだけじゃない?」

と星奈。

「違う、警戒している奴らの視線とは少し違うんだ。俺がそっちを向けば逃げるなり目をそらすなりする」

「悲しいな…」

と俺。俺も似たようなもんだけど。

「では憑かれてるなんていう可能性はないか？」

「お、その可能性はあるな（あるわね）」

と夜空の意見に続く俺と星奈。小鷹も顔を青くしてうつむいている。

「取り敢えず、お被いに行つてこい（行ってきなよ）（行ってきなさい）」

3人で検討違いなことを言つて帰りの支度を済ます。ただ、何でかな。

この時は真面目に答えを出したはずだった。

そうして今日の部活を終え、とつと帰りだす俺達。小鷹も早急に走つて帰つて行つた。

下校ルートは星奈の家の前を通るので、今日は星奈と帰る。

「あんた、家こつちなの？」

「ああ、昔住んでた家にまた引つ越して来たから」

「あつそ」

どうでもよさげに振る舞う星奈。まあ、どうでもいいわな。

「あ！あのでっかい家懐かしいな。今もあつたんだ」

「え？あそこあたしの家よ？」

「嘘？」

意外だった。あの大きめの家。失わなかった数少ない記憶の1つ。そんなこんなで家に着く。

母も父も共働きのため静かな家で、少し早めの晩飯を食べる。料理は超が着くほど下手くそで俺が作ることはない。

買い置きしてあるカップ麺の蓋をあけ、お湯をそそぐ。これが何時もの晩飯。

「やっぱり」曰？”のは凄く美味しいと思う。後はベン・キョー（勉強）をして、ゲームをして、風呂に入って寝て。

そんな生活を何日か繰り返した。

ある日、俺は何かに見られてる気がした。

マジですか…。

飯を食うとき、トイレに行くとき、移動教室のとき。怖えよ、割とマジで。

授業も終わり部室に向かいながら考える。

相談すべきか？誰に？

隣人部のメンバーに。

そうだ、相談しよう。

そうしよう。

怖いのは嫌だもんね。

ガチャ。

ドアを開け、第一声を放った。

「俺、何か最近見られてる気がするんだよなあ」

なんとという既視感^{デジャヴ}。

「またその話か…」

「今度はあなたなの？」

各々、反応するが夜空は呆れた感じの、星奈は心配する感じの反応をとる。

星奈の反応が少し嬉しい。椅子に座ると、星奈が少し離れる。

……えーと、何故に？

「何で離れるんだよ」

「止めてよ、次はあたしに憑くわ!!」

自分の心配をしていたようだ。少しショックだったが今はそれどころではない。

「しかし、二人も同時に憑かれるのは考えにくいな。やはりストーカーか？仕方あるまい、部活に支障が出ぬよう、私も協力しよう」

「あたしも仕方なく協力するわ…」

どうやら強い味方をげと。嬉しい限りです。

「よっしゃ！！！！！」

部室に突っ込んでくる小鷹。とてつもなく、喜んでいる。

「どうしたんだ、小鷹？」

皆が抱いたであろう疑問について聞いてみる。

「最近、見られてる感じがしないんだよ！」

「そうか小鷹…しかし今度は海翔が見られてる気がするそうだよ」

「え？」

「そう言うことだ」

俺がピースして答える。

「小鷹も協力してもらおうからな」

ということでもまれた、隣人部協定。

何としてもストーリーカーなるものを捕まえる所存である。

翌日

……やってくれたな、星奈。

待て、今起きたことをそのまま話すぜ。

授業が終わりよっしゃ一息入れるかってときに、星奈が教室に入っ

て来て、俺の腕を半ば強引に掴んで引きずった。そうしたら、文章では表現出来ないくらい嫉妬？の片鱗を味わったぜ。

まあ、この際どうでもいい。

星奈に連れられて夜空、小鷹と合流した俺らは取り敢えず歩き出す。

…だが周りからの視線が痛い。
当たり前である。

(事故で)傷を負ったヤンキーと若干金髪に目付きの悪いヤンキーと学年1位の頭脳とその容姿の星奈に、星奈とはまた違う美しさの夜空という4人。

目立たない訳がないのだ…。

目立っては意味がないので仕方なく解散。
しかし、俺が星奈を、小鷹が夜空を無理やり手込めにして連れ回しているという噂は学年中を駆け巡った。

同日放課後、1人で歩いているとやはり見られている。階段をダッシュであり、曲がり角の所で犯人を待ち伏せる。

「ひゃー！」

声の主は可愛らしい。

女の子だった…。

制服おかしいけど…。

そして無表情のままこう言ったのだった。

「これは、いわゆる」

「かつあげ」というものですね」

何故、若干嬉しそうなかわからなかった。

「違う!」

だが俺は即座に否定した。

なんだかな、最近見られてる気がすんだ。(後書き)

次回早いです。

何、この娘…いたい…（前書き）

うっ遅れました。

サーセンm) (m m) (m

反省に反省を重ね、

猛省という形で謝罪させていただきます。

何、この娘…いたい…

取り敢えずこのようわからん女子を部屋へ連れていく。

「女の子に男装…。更には拉致、監禁。海翔にそんな趣味があるなんて思わなかったわ」と星奈。

「待て、早とちりすんな。俺にそんな趣味はない。そして監禁は冗談でもやめろ」

…ということでサクサク事情を説明してもらった。

「わたくしのなまえは楠
(くすのき) 幸村（さいむら）です」

「何か戦国武将みたいな名前ね」

「そのとおりです」

「え…じゃあその…男な…の？」

「はい」

マジか。生きていて1番驚いたやもしれんね。
男の娘ってことか？

「で、なんで海翔なわけ？」

「二神せんぱいだけではありません。羽瀬川せんぱいもかんさつさせていただきました」

え…じゃあストーカーの正体ってこの子かよ！

「でなんで観察してたんだ」

直球かつ簡潔に聞いてみる。

「わたくしじつは、いじめをつけているのです」

「へー、この学校でもあるんだな。そういうの」

「当たり前だ。そんなもの何処にだってある」

小鷹が物思いに考え、それに夜空が回答する。

「いじめにもどうじゃない、おとこらしくなるためにかんさつさせていただきました」

「だからってなんで俺ら」

「せんぱいたちは、おとこのなかのおとこです。がつじつのきそくをきにすることなくけんかにあけくれ、かつあげをし、びしょうじよをはべらせ、てんじょうてんげゆいがどくそん…」

ああ…この子とてもない馬鹿だ。

アホの子すぎる。

「俺は規則は守るし、ケンカはめったにしないし、かつあげをしないし、美少女を侍らせてもいない」

事実です。

「で、具体的にはどのようないじめを受けているのだ？」

「いっしょにつれしょんにつれていってもらえなかったり…どっじぼーるでわたくしだけねらわれなかったりです」

それは男の娘に反応出来ないからそうなってるだけじゃないか？

「なあ、それは『それは大変悪質ないじめだな』」

小鷹が俺の考えていることを言おうとする、が夜空にそれを阻まれる。

夜空が俺らに耳打ちをしてくる。

「こんな馬鹿を見逃すわけではない。面白いから取り敢えずキープだ」

PTAさん悪質ないじめが始まるうとしてますよ。

「ということで隣人部に入らないか？ここならば小鷹や海翔の男らしさを学べるぞ」

「……………」

ダシに使われた俺、小鷹。不満が無い訳がない。でも夜空や星奈の視線が怖い。

「でしたら、わたくしもこのぶににゅづぶさせていただきます」

こうしてまたよくわからん部員が1人増えた。

「ところで二神せんぱい、羽瀬川せんぱい」

「ん？」

「あにき」と呼びしてもよろしいでしょうか？」

「勝つてにしてくれ!!」

さらに俺と小鷹は”あにき”になった。

何、この娘…いたい…（後書き）

眠いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1941u/>

俺だって友達が少ない

2011年11月5日01時14分発行